

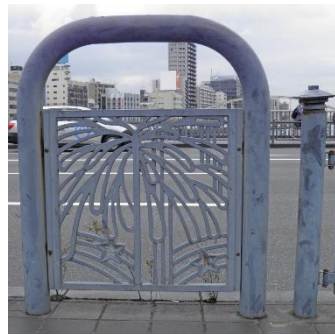
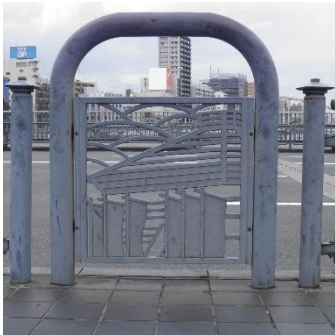


8月13日、曇り空の下、私は両国橋へと向かった。生憎の曇り空ではあったものの、3km程離れているスカイツリーははっきりと見ることが出来、両国の由来である江戸と下総の境を刻むような隅田川を眼下に、そして東京の大動脈の一つである首都高速6号線を行き交う車、総武線の電車を見ながら、両国橋を渡った。

橋を渡っている時、両国らしい行司の持つ軍配や国技館、花火をデザインに組み込んだ欄干を見て、デザインをした人の粋を感じたが、橋の始点の球体のオブジェは一見何を表現しているかわからなかった。格子部分は夜光ったりするのであろうか。夜に両国でちゃんこ料理を食べた後の腹ごなしにでもまた見に行ってみたい。



現在のこの両国橋は今から83年前の1932(昭和7年)年に造られた。勿論1932年以前にも両国橋は存在していた。建設のきっかけは今から358年前に遡る。1657年3月(明暦3年1月)に起こり、諸説あるものの6万から10万人以上(1657年の町人人口は約28万人と推定されている)が犠牲になり、現在の千代田区、中央区のほぼ全域、文京区の約60%、千代田区寄りの江東区、新宿区、台東区、港区の地域に甚大な被害を及ぼした「明暦の大火」がこの両国橋の建設の契機となる。想像するに忍びないのだが、この地域の人々は火災発生時、周囲に橋が無かったため逃げたくても逃げられなかったという。しかしこのような出来事はあったものの、その後は欄干や浮世絵にも描かれているように隅田川から打ち上げられる



花火を見るには絶好のスポットになり、現在に続く、人々に親しまれる場所となっている。



両国納涼大花火

1844～1853年 歌川広重画 山田屋庄兵衛版

人々が行き交う両国橋(中央黒い箇所)と舟を乗り降りする3人の女性が描かれている。

両国橋を越え、次に私は回向院へと向かった。京葉道路を千葉方面へ少し歩くと、回向院の門が見えてきた。この回向院は、先ほど紹介した明暦の大火後に、犠牲者を供養するため、徳川家綱によりその歴史が始まった。その後、明暦の大火の犠牲者だけでなく、その他の大災害の犠牲者、水子等の色々な人物、また犬猫、馬といった動物がここ回向院では供養されている。左上段の写真から、猫の供養碑、力士の供養碑「力塚」、関東大震災供養塔を写したもので、そして下段左の写真はいわゆる「義賊鼠小僧」こと鼠小僧次郎吉の墓の写真である。また、丁度動物供養の卒塔婆の上で毛繕いをしている猫もあり、猫が好きな私は、猫がたくさん眠っている場所で愛くるしい姿を見ることができあたたかな気持ちとなった。右下の写真は回向院門前の墨田区の案内板にプリントされていた第二次世界大戦前の回向院の姿である。



回向院を散策した後、私は「本所松坂町公園」へと向かった。こちらの本所松坂町公園は、ほんの街角の隅にあり、一般的な緑があり遊具があるような「公園」の作りではないので、回向院からは近いものの、到着するまで少し迷ってしまった。

この本所松坂町公園は、忠臣蔵で有名な赤穂浪士の討ち入りがあった吉良上野介の屋敷跡、の一部だそうである。昔は約 8400(旧国立競技場のグラウンドの面積が約 7600 m²)m²もの面積を有していたそうなのだが、その後、一般の民家やビルが建設され、今ではこの写真の一角のみが昭和 9 年に地元の有志に購入され造られた部分が残っている。現

在では、有志から寄付された公園として管理されている。桜の木やしだれ柳が植えられており、中には屋敷にあった首洗い井戸や吉良上野介の祀った稲荷神社、吉良上野介の像が置かれている。

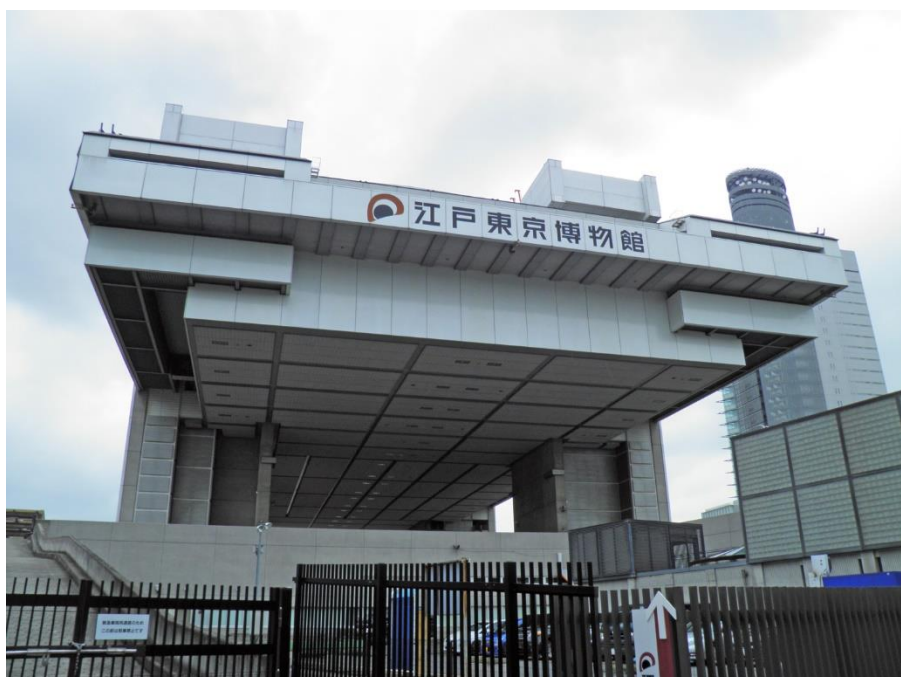


この後は、今は「両国公園」となっている勝海舟(1821-1899)生誕の地へと向かった。



先ほど訪れた本所松坂町公園とは異なり、過去の歴史的な建築物等は残っていなかった。唯一、勝海舟と思われる人物を模ったブランコ、そして咸臨丸と思われる船を模った遊具が設置されていた。しかも、遊びはしないが、これらの遊具の周りの柵の入り口は閉ざされていた。謎多き公園である。

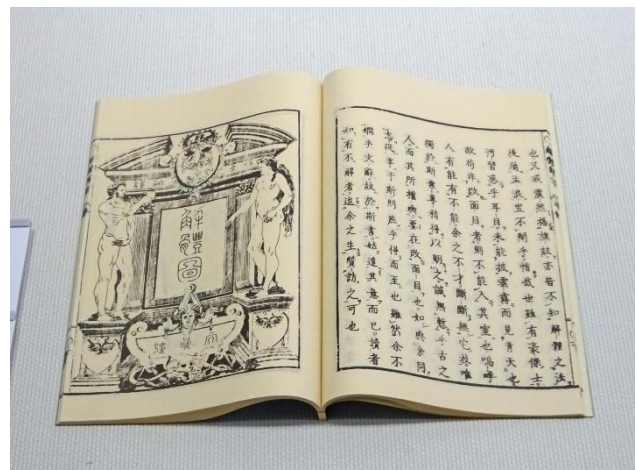
両国公園を後にし、京葉道路に出、清澄通りを北方面へ向かった。総武線の高架下をくぐると、平成5年(1993年)に開館した、江戸東京博物館の特徴的な建物が見えてきた。この日は盆の入りということで、混雑しているか閑散としているかのどちらかと思っていたが、親子連れや外国人観光客を主としてたくさんの人で賑わっていた。博物館内部は現代的な外観とは裏腹に、名前の「江戸」が表すように東京の「歴史」についての展示が非常に多く展示されていた。



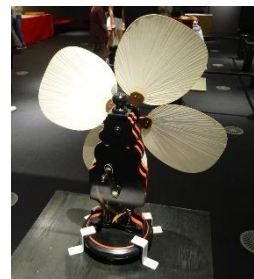


2、3分は乗っていただろうか、長い、長いエスカレーターで6階までのぼり、入口を抜けると、まず日本橋の復元が目に入った。日本橋自体は1603年に架けられたが、この日本橋の復元は1800年代初頭の記録を元にして再現されたという。非常に写真では長い印象であるが、復元されている部分は北側の半分のみで、南側部分の長さを合わせると全長は約51mにもなったという。現在の日本橋も迫力があり、また周囲は賑やかであるが、このスタイルの橋が現役だった時代も、一帯に様々な荷物が到着する河岸があり、賑わいは相当なものであっただろう。この「日本橋」を渡ると、「江戸ゾーン」で当時の江戸の町の鳥瞰模型や建築物の模型、江戸の行政、将軍や大名の暮らし、町人の生活や商業、風俗、災害にまつわる展示や解説等、様々なものが楽しめた。

展示のほんの一部であるが、写真左上から19世紀前期の三井越後屋江戸本店(現在の三越)、上方と江戸を結んだ菱垣廻船、山車人形として関羽を配した神田明神の山車(須田町)、先ほど歩いた両国橋の模型、解体新書のレプリカの写真を掲載しておきたい。



他にも、レプリカではあるが肥桶の展示や吉原や怪談の浮世絵の展示、また江戸時代の発明の展示もあった。写真がその発明の一つである。これは手回し扇風機というもので、実際自分自身も体験できたのだが、回すのが意外と大変で、しかも得られる風は正直期待以下で、もっとも現在の東京より幾分は気候はましだったのかもしれないが、当時の人たちの避暑方法を気の毒に感じた。



また、江戸東京博物館には、江戸の展示だけではなく、江戸が「東京」となった明治以後の展示物や写真も数多く展示されている。



両国橋と隅田川 (「東京風景」1911年)



日本橋 (「東京風景」1911年)



左の写真二枚は今から約 100 年前の両国橋と日本橋の写真。右は 1890 年(明治 23 年)に浅草に竣工し高さ約 52m を誇ったものの、関東大震災で崩壊してしまった凌雲閣の模型。他にも第二次世界大戦中の不発弾や服、生活用具の展示、また戦前期から現在に至るまでの機械や車、住宅やファッションの移り変わり等、多種多様な展示を見ることができた。



4 時 15 分過ぎ頃江戸東京博物館を発ち、東京都慰霊堂と東京都復興記念館のある横網町公園へと向かった。話は脱線するのだが、都営大江戸線両国駅内の周辺地図の英語表示の“Yokoami cho”という表示を見るまで、国技館もあり、ずっと横網町公園だと思っていた。恥ずかしい限りではあるが、この勘違いをしていたのは私だけではないと信じた。さて、横網町公園に着いたのが 4 時 25 分前後であった。東京都復興記念館の入館が午後 4 時半までであるという案内を見た私は、急いで復興記念館へと向かい、滑り込みで中へ入ることができた。左の写真の東京都復興記念館は、関東大震災の被害状況

と復興事業を記念するために、東京都慰霊堂とともに昭和 6 年に建設された。



中には被害状況を写す写真の他、左の三枚の写真の様な実際に震災による火災によって被害を受けた当時の品々が展示されていた。ガラスやタイプライターが原型を留めない程の姿を見ると、人が被った傷や体、心の痛みはまるで想像がつかない。また、明治 37 年に架けられた両国橋の焼けてしまった橋名板もあり、ここでも両国橋の変遷の一つを垣間見ることができた。一口に両国橋といっても、両国一帯で両国橋の歴史が見られることはとても興味深い。そして、崩壊後の凌雲閣の写真も見ることができた。盛者必衰の理を感じてしまう。中華民国やアメリカの救援活動の紹介や当時の広告も展示されており、2011 年の東日本大震災の際の各国からの支援を思い起こした。震災は無ければいいのが勿論だが、このような救援活動が歴史的に繰り返されてきていることを知る



ことができ嬉しく思った。震災の中、活動する人の写真(上が避難民が集まる上野駅、下が炊き出しを行う人々の写真)を見ることもできた。先に述べたように、被害状況の生々しい写真だけでなく、将来起こり得る震災に備えて、上野公園が整備されたことや、両国橋を含む隅田川の 10 大橋が整備されたことも知ることができ、他の隅田川にかかる橋についても、興味が湧いてきた。また、関東大震災についての展示のほかに、東京大空襲の被害やそれぞれをテーマに描かれた生々しい、迫力のある油絵も展示されていた。その後、係員の方に急かされ、私は 5 時少し前に復興記念館を出た。



復興記念館を出ると、草花で彩られた、大きな「東京空襲犠牲者を追悼し平和を祈念する碑」が目に入った。この碑の作成に多くの寄付が集まったそうだ。内部には空襲で亡くなられた方々の氏名が書かれた「東京空襲犠牲者名簿」が納められているという。一定期間で花壇の草花は植え替えられるようで、今回私の見ることができたのは夏らしいスイカとブドウをモチーフにしたものだった。西日が眩しくなり始めた頃、私は同公園内にある東京都慰霊堂へ向かった。残念なことに、既に閉館しており、中を見学することができず、かつ耐震補強工事中であったため、機会を見つけた次回是非訪問してみたい。



今回の両国散策では、江戸から現代にかけての両国、そして東京の歴史を少しだけ、覗くことができた。今後もこの地を訪れ、また是非違った視点で見たい。

進藤竜一

今回訪れた場所の簡略図

